

書 評

『通信制高校のすべて  
—「いつでも、どこでも、だれでも」の学校—』  
(手島純編著 彩流社)

水 内 宏

1.

「子ども（生徒）を学校に合わせる教育」ではなく「子ども（生徒）に合った教育をこそ創造しなければならない」—これは学校づくりの基本だと強調する障害児教育関係者の主張を感動と共感をもって受け止めたのは、およそ半世紀前、駆け出しの教育研究者のころのことでした。障害児学校だけでなく、およそ全ての学校のあり方を考えるにあたってのこの基本的要諦は、その後、活かされ発展してきているのでしょうか。昨今の現実、「(子ども・生徒にではなく)学校に合わせ」「揃える教育」という傾向が少なくないと思っておりますが、そんななか、今、この学校づくりの要諦の創造的な展開の可能性を秘めたのは通信制高校ではないかと痛感させてくれたのが本書でした。

高校教育といえば全日制、しかも普通科を中心に考えがちですが、「偏差値」の1点1点に一喜一憂しない通信制高校にこそ教育的真理・真実が活きているとみることができるのではないかと、そして、通信制高校を通して中等教育のあり方を展望することが重要ではないかと考えさせてくれる—それが本書ではないかと受け止めました。

2.

本書は、以下の13章を中心に、編者手島氏による「はじめに」および「おわりに」を加えて全270ページから成る。

- 第一章 なぜ通信制高校なのか (松本幸広)
- 第二章 通信制高校の基礎知識 (手島 純)
- 第三章 高校教育における通信制高校の役割 (井上恭宏・手島 純)
- 第四章 公立通信制高校 (井上恭宏)
- 第五章 私立通信制高校 (神崎真実)
- 第六章 株式会社立通信制高校 (神崎真実・土岐玲奈・手島 純)
- 第七章 サポート校 (内田康弘)
- 第八章 広域通信制高校と「サテライト施設」 (阿久澤麻理子)

## 第九章 通信制のシステムで学ぶとは（土岐玲奈）

### 第一〇章 通信制高校の歴史（石原朗子）

#### 第一章 通信教育をめぐる思想（古壕典洋）

#### 第二章 座談会「通信制高校のすべて」（全員）

#### 第三章 通信制高校に関する書籍・論文の紹介（全員）

中学校を卒業する者は毎年およそ100万人、そのうち通信制高校に進学する生徒はおよそ2万人。驚いたことに、卒業時には5万人に増えていると言います。20人に1人が通信制高校の生徒ということになります。高校生総数と18歳人口の減少が引き続く中でのこの数字は驚異です。その理由も解き明かしながら、全日制・定時制・通信制という高校教育の主要な形態それぞれの現状や課題にも切り込んでいる第一、二、三章、および通信制高校の歴史をコンパクトにまとめた第十章によって通信制高校の基礎知識を確保できます。

第四、五、六章は、通信制高校の主要な設置形態である公立通信制、私立通信制、株式会社立通信制それぞれの学校の特徴がわかりやすくまとめています。さらに、「サポート校」、広域通信制高校の「サテライト施設」など通信制高校を知るに必須の学校・施設の概要が簡潔に語られています（第七、八、九章）。

執筆者全員による座談会（第十二章）も、各章の言い足りなかったことの加筆と課題の全体的な総合の役割を果たしているといっているでしょう。

## 3.

以下、中等教育の制度・課程の今後のあり方を考えるうえでの本書の意義、若干の課題等について、必要に応じて水内自身の研究経験にも触れながらいくつか述べてみます。

① 大学院生時代のことですが、学科主任（細谷俊夫教授）が「神奈川の方で、登校拒否の子たった二人だけの学校ができたらしい（当時は「不登校」ではなく「登校拒否」が一般的だった）。宮澤学園と言っていたが、この“学校”の今後の動きに、君たち、注目していなさいよ」と語っていたことを覚えています。細谷教授のゼミでは、日産自動車の社内訓練施設の見学（追浜工場だったと思う）、全国各地の工業高校（時には農業高校も）と企業内教育訓練施設との「連携教育」の見学、教職員・生徒との懇談などを行いました。それらを通じて、全日制や普通科の“傍系”とみられがちな定時制、専門系の高校や学科などの側にも視点を据えながら中等教育問題をとらえることの重要性を学んでいったように思います。また、東京と大阪のど真ん中にある公立の中学校通信制のこと、学習指導要領一般の他に通信教育指導要領が存在すること（本書でも触れられています）を知りました。夜間中学校への関心もふくらんでいったように思います。

星槎大学と大学院で実際に通信制教育に携わってみるにより、また、第一線で活躍中の識者による「通信制高校のすべて」を本書で知ることにより、大学院ゼミ以来の研究と経験が一本の線でつながってきたように思っています。

“傍系”視されてきたところに目を向けることなくして全体像は見えてこないということを強く主張したいと思います。単線型を基本としているはずの初等中等教育制度に本流と傍系などの別はないはずです。

② 中等教育制度・内容の改革の要諦のひとつは、働くことと学ぶことの強靱な結びつきをどう実現するかにあるように思います。前期中等教育期は、近い将来の社会的労働への参加に向けて精神的・身体的準備状態をどう構築するかという課題から逃げてはならないし、後期中等教育期は、現実に社会的労働に参加している青年も少なくない中で、“働きかつ学ぶ”をいかにして生き生きと実現するか（しているか）をもっと語らねばならないと思っています。本書が、この問題、特に生徒たちの“働く”をどう考えているのかが気になりました。

\*この点は、水内「学校制度を考える——学びたいと思った時に学びの機会が保障される制度に、“働きかつ学ぶ”をキーワードに中学校卒以降の大胆な改革を——」（『教育学のすすめ』第11章所収、一藝社、2017）を参照ください。中学卒業後の一時的な脱出の自由が保障されるような制度の必要を提案し、高校段階というのは同一年齢集団による構成ではなく、多様な社会経験を経た者や現役労働者などから成る異年齢集団であっていい、“働きながら学ぶ”ではなく“働きかつ学ぶ”が重要だなどと主張しています。

③ 通信制高校の教育実践がもっと語られていいのではないかと痛感しました。通信制高校内部では交流があるのですが、外部に見える形で生徒の姿と教職員の実践が披瀝される必要があると感じます。その点では、第九章「通信制のシステムで学ぶとは」は異色の章だと思いました。ここで記述されているような生徒たちの学びと働き環境、彼ら・彼女たちの認識と行動の特徴、それらと切り結ぶ教職員の実践が続編として上梓されてもいいのではないのでしょうか。かつて、「これ、すばらしい本ですよ」と言って共同研究者（経済学部出身の小学校教頭）に薦められたのが『通信制高校生の青春』でした（長野西高等学校通信制編、あゆみ出版、1991）。ぜひ、21世紀版「通信制高校生の青春」を期待します。

④ 通信制教育に関する文献・資料の整備を推し進める必要を痛感します。本書第一三章に執筆者全員による文献紹介が一応なされています。これを手がかりに高校を含む中学から大学・大学院に関わる通信制教育の「すべて」の研究と実践の資料が整備されるといい、できれば夜間中学までも網羅したデータベースを作りたいとの念を強くしたことでした。

